

南湖のいきもの 動物編

ぎょるい
魚類

稲葉 修

南湖は、今から約200年前に造られた庭園(人工水面)で、それ以前は「大沼」と呼ばれた湿地帯であったという。

2007年度の南湖の魚類調査では6科15種類の魚種を確認したが、1990年代に確認されていた種を含めると、1990年代から現在までに少なくとも8科20種の生息があったと考えられる。しかし、これらのうち在来種と思われるのはギンプナやドジョウなどごく少数であり、南湖にみられる魚種の大半は外来種である。現在、南湖の国内外来種としては、タモロコヤモツゴ、国外外来種としてはカムルチーの個体数が多い。また、最近では中国や朝鮮半島原産のカラドジョウが増加してきた。カラドジョウは、在来種のドジョウに何らかの影響をおよぼす可能性があり、注意が必要である。



南湖の風景

今から約200年前に造られた南湖は、外来種の多い湖。

2007年8月20日(千世の堤より) 写真:稲葉 修



ウキゴリ (ハゼ科)

全長13cmほど。淡水に生息するハゼで、福島県では特に太平洋流入河川の中流域や湖沼に広く分布する。南湖では、北岸の船着場付近で確認することが多く、夏場、水草の生い茂る中を泳いでいる様子を観察することができる。 2007年10月9日(南湖北側湖内) 写真:稲葉 修



ドジョウ (ドジョウ科)

全長は大きな個体で12cmをこえる。南湖にも生息するが、流入する用水路に多い。

2007年10月9日(南湖北側湖内) 写真:稲葉 修



カラドジョウ (ドジョウ科)

全長18cmほど。中国や朝鮮半島原産の国外外来種。ドジョウに比べ、口ひげが長く体高も高い。

2007年10月9日(南湖西側の用水路) 写真:稲葉 修



ギンプナ (コイ科)

全長25cmほど。南湖全域にみられ、釣りの対象としても親しまれている。

南相馬市の個体 写真:稲葉 修



コイ (コイ科)

全長は大型の個体で1m近くなるものもいる。南湖では放流された個体が多いと思われる。

2007年8月20日(花月橋下の水路) 写真:稲葉 修

南湖のいきもの 動物編 ぎょるい 魚類



オイカワ (コイ科)

全長16cmほど。国内外来種。以前、南湖では多かったというが、現在は少なくなっている。

猪苗代町の個体
写真:稲葉 修



モツゴ (コイ科)

全長8cmほど。国内外来種で、南湖での個体数は多い。地方名はメヌキ、クチボソ。

2007年8月20日(南湖南側湖内)
写真:稲葉 修



トウヨシノボリ (ハゼ科)

全長7cmほど。南湖全域にみられ、個体数は多い。国内外来種と考えられる。

2007年10月9日(南湖西側の用水路)
写真:稲葉 修



タモロコ (コイ科)

全長15cmほど。ゲンゴロウブナなどの放流に混じり、南湖に定着した国内外来種。

2007年10月9日(南湖西側湖内)
写真:稲葉 修



オオクチバス (バス科)

全長60cmほど。近年南湖では市民活動による駆除で、減少している。国外外来種。

2007年8月20日(花月橋下の水路)
写真:稲葉 修



ブルーギル (バス科)

全長は最大で25cm。雑食性で、オオクチバス同様、その食害が心配される国外外来種。

宮城県個体 写真:稲葉 修



ナマズ (ナマズ科)

全長約60cm。南湖を含む県内で以前から親しまれる魚だが、実は古い時代の国内外来種。

2007年8月20日(南湖南側湖内)
写真:稲葉 修



タイリクバラタナゴ (コイ科)

全長8cm。南湖では比較的多く、釣人に人気があるが、アジア大陸東部原産の国外外来種。

2007年8月20日(南湖産の飼育個体)
写真:稲葉 修



カムルチー(タイワンドジョウ科)

全長80cm。アジア大陸東部原産の国外外来種。南湖に多く、夏に仔魚を守る成魚が見られる。

宮城県個体 写真:稲葉 修

外来種だらけの南湖 一昔はどんな魚がいたの？

南湖にすむ魚のほとんどは、国内や国外原産の外来種である。では、それらの魚が人の手によって持ち込まれる前、どんな魚がすんでいたのだろうか。南湖は今から約200年ほど前に庭園として造られているが、それ以前は湿地帯が広がっていたとされている。また、現在もみられる湖周辺の湧水の存在から考えると、昔も周囲の丘陵地からは湧水を水源とする細流があったものと思われる。

これに似た水環境は現在の南湖周辺の丘陵地に残っており、現在そこには、ホトケドジョウやアブラハヤなどが生息している。昔の南湖造成以前にみられた湿地とその周辺細流には、これらの魚種が生息していた可能性がある。また、南湖から流れ出す、南湖直下の藤乃川には、かつてウナギやウグイ、フナ類、ギバチ、スナヤツメなどが多かったという話が残っている。

これらのことから、南湖造成以前の湿地や藤乃川の上流域では、那須連山をバックにしたこれらの水辺に、たくさんの魚たちが生き生きと泳ぎまわっていたことが想像される。

南湖のいきもの 動物編

こうかくるい 貝類
甲殻類
稲葉 修

南湖では、ヌマエビ科のヌカエビとザリガニ科のアメリカザリガニの2科2種を確認した。国外外来種のアメリカザリガニの個体数は多く、湖内全域で確認される。

貝類は、2007年までに6科6種類の貝類を確認している。ただし、今後も調査を継続していけば、福島県南部地域の淡水にみられる多くの貝類が確認できるものと思われる。南湖で最も良く見かけるものはオオタニシであり、湖内全域で確認できる。大きさ20cm前後の黒い二枚貝はドブガイで、近年個体数は少なくなっているようである。また、湖内の一部には大きさが5mmほどのマメシジミが生息している。マメシジミは、開発事業等によって、主な生息地である湧水地の埋め立てと共に県内各地で減少している。



ドブガイ類 (イシガイ科)

殻長は20cm前後。県内各地の湖沼や用水路に生息している。南湖では湖内の水深1m前後の泥底にて確認できる。遺伝的な分析により、3種類のドブガイが存在する。
2007年10月9日(南湖西側湖内) 写真:稲葉 修



マメシジミ類 (マメシジミ科)

殻長約5mm。県内の湧水地等に数種類が生息。南湖では湧水の流れ込む地点の泥底で確認。

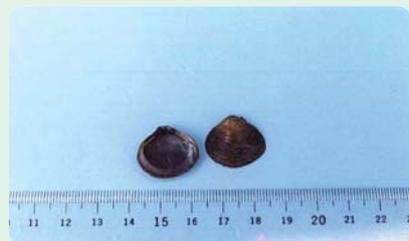
2007年10月9日(南湖北側湖内) 写真:稲葉 修



オオタニシ (タニシ科)

殻高6cm。南湖では、水深の浅い岸辺で多くの個体を見かける。

2007年8月20日(千世の堤)
写真:稲葉 修



マシジミ (シジミ科)

殻長4cm。南湖では、岸辺の砂礫底に生息するが、個体数は多くない。

2007年8月20日(真萩か浦付近)
写真:稲葉 修



アメリカザリガニ (ザリガニ科)

体長15cm前後。アメリカ原産の国外外来種。南湖と周辺の水路に数多くみられる。

2007年8月20日(水月橋付近の南湖内)
写真:稲葉 修

南湖のマメシジミ

2007年、南湖のごく限られた場所の泥底からマメシジミ類を確認した。マメシジミ類は殻長5mm前後で色はクリーム色、あるいは半透明のごく微小な二枚貝である。雌雄同体で胎生。福島県内で確認している個体は、愛媛大学の家山博史先生により、ウエジマメシジミ、ハイイロマメシジミなど数種類が確認された。県内のマメシジミ類の生息地は、奥会津や奥羽山系の標高1000m以上の山間の湿原や湖沼、阿武隈高地の湿地や湧水の流れる砂礫底の川、海岸線近くの湧水地など様々であるが、みな水質が良好で透明度が高く、低水温の場所である。このようなことから、マメシジミ類を南湖から見つけた時は正直驚いた。

南湖では、湧水の流れ込み付近の泥底から数個体を見つけたにすぎない。現在の南湖の水質や夏季の水温から考えると、マメシジミ類が生きていくにはかなり厳しい環境であると思われる。かつて南湖は大きな湿地帯であったとされているが、マメシジミ類はその時代の名残りの生き物なのだろうか。いずれにしても、大切にしていきたい南湖の一員である。



マメシジミの生息する細流
(南相馬市)

南湖のいきもの 動物編

りょうせいりい はちゅうるい
両生類 爬虫類
稲葉 修

爬虫類は2007年の地元の人々からの聞き取りで5科8種類を確認した。カナヘビはごく普通に見られるようであり、ヘビ類としてはヤマカガシとアオダイショウ、シマヘビが比較的多いようである。また、シロマダラの生息もあるようで、「シノガラヘビ」という本種とシノ竹の模様を上手く表現した地方名が湖沿岸地域に残っている。この他、カメ類の生息情報があり、その特徴から、国外外来種のミシシippアカミミガメと国内外来種のクサガメの生息可能性が考えられた。

両生類としては、2科4種類のカエル類を確認した。かつて生息したというアカハライモリは、現在みられない。トウキョウダルマガエルとニホンアカガエルは南湖西岸の草地などにみられるが、数は多くない。2種の主な生息地は湖西側の水田と考えられる。ウシガエルの個体数は多く、秋になると陸にあがった幼体の姿が目立つようになる。



トウキョウダルマガエル (アカガエル科)

体長はオスで7.5cm、メスで8.5cm。福島県では中通りと浜通り中心に分布する。南湖では湖西側の水田から湖西側の岸辺にかけて生息している。

2007年8月20日(水月橋付近の南湖岸辺) 写真:稲葉 修



ニホンアカガエル (アカガエル科)

体長は7.5cm。南湖西側の岸辺でみられるが個体数は少ない。

浪江町の個体 写真:稲葉 修



ニホンアマガエル(アマガエル科)

体長は4.5cmほど(メスの方がやや大きい)。湖岸の低木、人家の庭木にて確認できる。

茨城県の個体 写真:稲葉 修



ウシガエル (アカガエル科)

体長18cm。北アメリカ東部原産の国外外来種。南湖には1930年代後半には生息していたようである。

南相馬市の個体 写真:稲葉 修



ニホンカナヘビ (カナヘビ科)

全長は最大の個体で25cmほど。南湖岸辺の草地や鏡山の林床などで確認されている。

南相馬市の個体 写真:稲葉 修



シロマダラ (ナミヘビ科)

全長は最大70cm。主に夜間活動。南湖の湖岸では本種の特徴をとらえた地方名が残っている。

南相馬市の個体 写真:稲葉 修



アオダイショウ (ナミヘビ科)

全長は2m近くなる個体がある。南湖周辺の人家庭先、鏡山で時折目撃されている。

南相馬市の個体 写真:稲葉 修



ヤマカガシ (ナミヘビ科)

全長150cmほど。南湖周辺の水田、用水路などで目撃されている。毒ヘビであり、注意が必要。

南相馬市の個体 写真:稲葉 修

南湖のいきもの 動物編

昆虫類

三田村敏正・吉井重幸

南湖公園は本来、人工的な庭園であったにもかかわらず、広い水域と周辺の山や湿地、草地など変化に富んだ環境を有している。昆虫類も多数生息していると考えられるが、その中心はトンボ類やゲンゴロウ、コオイムシなどの水辺に生息する昆虫たちである。中でも、トンボ類は、羽化直後の未熟な時期に、水辺から離れ、周囲の林や草地へ移動する習性がある。南湖に隣接する鏡の山や松虫の原などは、この点からもトンボ類の生息に重要な役割を果たしているのである。ここでは、南湖に生息する昆虫の中から、水辺に生息する水生昆虫を紹介する。

トンボ目

南湖のトンボは、2007年の調査では25種が確認された。このうち、チョウトンボは一時、ほとんど見られなくなっていたが、2007年には比較的多く見られた。現在、コフキトンボ、セスジイトトンボが極めて多く、かつて個体数の多かったウチワヤンマ、オオヤマトンボは減少している。(執筆：三田村敏正)



セスジイトトンボ (イトトンボ科)

体長32mm。南湖に生息するイトトンボ科の中で最も個体数が多い。夏に見られる。

2007年7月25日(有明崎周辺) 写真:三田村敏正



オオアオイトトンボ (アオイトトンボ科)

体長46mm。体の一部が金緑色に光る。秋に発生するトンボで、11月頃まで見ることができる。

2007年10月20日(松虫の原) 写真:三田村敏正



ハグロトンボ (カワトンボ科)

体長60mm。翅が黒く、腹部が細いトンボで、夏に見られる。もともと小川や河川の中流に生息するトンボで、南湖の岸辺で見られる個体は、周囲の水路で発生した個体である。

1995年8月5日(有明崎周辺) 採集:三田村朝道



ウチワヤンマ (サナエトンボ科)

体長70mm。サナエトンボの仲間としては大型である。大きな溜池に生息し、水面に出た杭などに静止することが多い。

1995年8月5日(有明崎周辺) 採集:三田村朝広

南湖のいきもの 動物編 こんちゅうるい 昆虫類



ギンヤンマ (ヤンマ科)

体長70mm。溜池や水田周辺などに広く生息するヤンマ。南湖での個体数も比較的多い。7月から9月に多い。

2007年7月25日(有明崎~水月橋) 採集:三田村敏正



クロスジギンヤンマ (ヤンマ科)

体長65mm。ギンヤンマと良く似ているが、胸の横に黒い筋があることと、オスでは、腹部に青い斑紋があることで区別できる。ギンヤンマよりもやや薄暗い沼を好み、発生時期も6月から7月とやや早い。2007年7月25日(花月橋~千代の松原) 採集:三田村敏正



マルタンヤンマ (ヤンマ科)

体長70~75mm。南方系のヤンマで、福島県での記録は白河市といわき市、相馬市のみ。南湖では、メスが1頭だけ採集されている。

2007年8月4日(有明崎周辺) 採集:今井宣秀



オオヤマトンボ (エゾトンボ科)

体長83mm。岸辺にそって飛翔していることが多い。羽化は杭や岸辺の石垣などの他、岸から数メートル離れた松の幹でも行われる。

1995年8月5日(有明崎周辺) 採集:三田村朝広



コフキトンボ (トンボ科)

体長40mm。シオカラトンボと似ているがやや小さい。河川の河口付近や大きな溜池などに多く、南湖で最も個体数の多いトンボである。

2007年8月4日(有明崎~水月橋) 写真:三田村敏正



コフキトンボ (メスのオビトンボ型)

体長40mm。コフキトンボのメスは普通はオスと同じ体色だが、翅にオレンジ色の帯がある個体も見られ、このような個体は通称「オビトンボ」と呼ばれている。

2007年8月4日(有明崎~水月橋) 写真:三田村敏正

南湖のいきもの 動物編 昆虫類 こんちゅうるい

チヨウトンボ
(トンボ科)



体長35mm。翅は黒色から青藍色で、浮葉植物などの上をチョウのようにひらひらと飛ぶ。福島県レッドデータブックでは準絶滅危惧種に指定されており、特に中通りでは少ない。
2007年8月4日(常磐清水～真萩か浦) 採集:三田村敏正

アキアカネ
(トンボ科)



体長40mm。アカトンボの仲間では最も個体数が多い。初夏に羽化するが、9月以降に多く見られる。

2007年10月20日(常磐清水～真萩か浦) 写真:三田村敏正



シオカラトンボ (トンボ科)

体長50～55mm。各地に最も普通なトンボで、メスはその体色からムギワラトンボとも呼ばれる。

2007年8月4日(有明崎～水月橋) 写真:三田村敏正



ショウジョウトンボ (トンボ科)

体長48mm。オスは成熟すると体全体が真っ赤になる。メスはオレンジ色。夏に見られる。

2007年8月4日(有明崎～水月橋) 写真:三田村敏正



コシアキトンボ (トンボ科)

体長40～45mm。体は黒色で、腹部付け根がオスでは白、メスでは黄色となる。防火用水など人工的な池などでも見られるトンボ。

1996年7月4日(有明崎周辺) 写真:三田村敏正



ナツアカネ (トンボ科)

体長38mm。アキアカネと良く似ているが、胸の斑紋で区別できる。オスは成熟すると真っ赤になる。秋に多く、アキアカネよりも遅くまで見られる。2007年10月20日(松虫の原) 写真:三田村敏正



ノシメトンボ (トンボ科)

体長45mm。南湖に生息するアカトンボの中では最も大きい。翅の先端に斑紋があるのが特徴。アキアカネとともに個体数の多いアカトンボである。2007年10月20日(松虫の原) 写真:三田村敏正



マイコアカネ (トンボ科)

体長34mm。小型のアカトンボ。オスでは成熟すると顔の部分が青白くなり、舞妓が化粧をしたように見えることから名前がついた。

2007年10月20日(松虫の原) 写真:三田村敏正



ウチワヤンマの抜け殻



コフキトンボの抜け殻



オオヤマトンボの抜け殻

トンボの抜け殻

南湖のトンボたちは、岸辺の杭や石垣、ヨシの茎などで羽化する。夏には、たくさんの抜け殻を見つけることができる。トンボたちが暮らしていくには、このような羽化場所も必要なのである。

カメムシ目

水生半翅目（カメムシ目）は12種類確認されている。アメンボ以外は水中で生活をしているため、あまり目にすることはないが南湖の水環境を知る上では非常に重要である。（執筆：吉井重幸）



コオイムシの仲間

コオイムシの仲間は、雌が雄の背中に産卵し、雄が子供を背負うことから、「子負い虫」と名づけられた。一般的には、20mmより小さいものがコオイムシで、20mmより大きいのがオオコオイムシである。正確には体色や前脚の力こぶの形などで区別されるが判別は難しい。



コオイムシ（コオイムシ科）

体長14～20mm。黄褐色で20mmより小さく卵型。環境省レッドデータブックでは「準絶滅危惧種」となっているが、福島県では普通種であることから、県リストでは「注意種」となっている。 2007年10月20日（有明崎～水月橋）写真：吉井重幸



オオコオイムシ（コオイムシ科）

体長23～26mm。濃褐色で20mmより大きく、丸く小判型。浅い湿地や休耕田から、溜池、河川など様々な環境で見られる。

2007年10月20日（有明崎～水月橋）写真：吉井重幸



ミズカマキリの仲間

上がミズカマキリで呼吸管が長い。下がヒメミズカマキリで、形はそっくりだが、ミズカマキリと比べて小さく、呼吸管が体長よりも短いのが特徴で容易に区別できる。また、ミズカマキリは水面近くにいることが多く、ヒメミズカマキリは底の方にいることが多い。



ミズカマキリ（タイコウチ科）

体長40～45mm。呼吸管が体長より長い。陸上にいるカマキリのように鎌のような前脚をしている。

2007年10月20日（有明崎～水月橋）写真：吉井重幸



ヒメミズカマキリ（タイコウチ科）

体長24～32mm。ミズカマキリより稀な種で、きれいな水の池沼に生息している。

2007年10月20日（有明崎～水月橋）写真：吉井重幸

南湖のいきもの 動物編 こんちゅうるい 昆虫類



マツモムシの仲間

マツモムシやミズムシの仲間は、ボートのオールを漕ぐような泳ぎをすることから、英名で「ボートマン」と言われている。マツモムシの仲間は背を下にして泳ぐのが特徴で、水面で獲物を待つマツモムシと中層を泳ぐコマツモムシが確認されている。



マツモムシ (マツモムシ科)

体長11~14mm。マツモムシは背を下にして泳ぐのが特徴で、水面付近で獲物を待つ。刺されると痛いので手でつかむ時は注意が必要である。

2007年10月20日(有明崎~水月橋) 写真:吉井重幸



コマツモムシ (コマツモムシ科)

体長5.8~7.2mm。マツモムシよりも小型で、マツモムシが水面付近にいるのに対し、中層を泳ぐ。県内での記録は少ない。

2007年10月20日(有明崎~水月橋) 写真:吉井重幸



ミズムシの仲間

背中を上していることから、マツモムシとは容易に区別できる。何かにつかまっていなくて浮いてしまうので、紙片を入れて浮沈みを観賞したことから「風船虫」とも呼ばれている。ホッケミズムシとミゾナシミズムシは、いずれの種も環境省のレッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されている。ミズムシ科の同定は、碓井徹氏による。



ホッケミズムシ (ミズムシ科)

体長9.5~10.8mmの大型のミズムシ。中通りでは稀な種である。

2007年10月20日 写真:吉井重幸



ミゾナシミズムシ (ミズムシ科)

体長5.0~5.9mmの小型のミズムシ。

2007年10月20日 写真:吉井重幸



チビミズムシの仲間 (ミズムシ科)

体長3mm前後の小さなミズムシ。チビミズムシの仲間は雄が水中で「ジィ・ジィ・ジィ」と鳴くことができる。

2007年10月20日(有明崎~水月橋) 写真:吉井重幸

南湖のいきもの 動物編 こんちゅうるい 昆虫類

アメンボの仲間

アメンボは水面を歩くように動きまわり、水面に落ちた昆虫などを食べる。鉛のような匂いがすることから「鉛棒」と呼ばれる。南湖ではナミアメンボ、ヒメアメンボ、ハネナシアメンボが確認されている。アメンボ科の同定は、碓井徹氏による。



ナミアメンボ (アメンボ科)

体長11～16mm。アメンボの中で最も普通に見られる種。南湖での個体数も多い。

2007年7月25日(有明崎周辺) 写真:三田村敏正



ヒメアメンボ (アメンボ科)

体長9.0～12mm。池沼や水たまりなど、普通に見られる。

2007年10月20日(有明崎～水月橋) 写真:吉井重幸

コウチュウ目

水生の甲虫は2種類のゲンゴロウが確認されている。そのうち、ルイスツブゲンゴロウは浜通りで数か所確認されているが、全国的にも希少種であり、神奈川県では「絶滅」となってしまった。

(執筆:吉井重幸。同定は疋田直之氏による)



ツブゲンゴロウ (ゲンゴロウ科)

体長4.0～4.9mmの小さなゲンゴロウ。池、沼、水田、湿地などで普通に見られる。

2007年11月10日(有明崎～水月橋) 写真:吉井重幸



ルイスツブゲンゴロウ (ゲンゴロウ科)

体長3.9～4.7mm。ツブゲンゴロウによく似ているが、上翅に濃褐色の縦縞がある。産地は局所的で、中通りでは南湖のみで確認されている。

2007年11月10日(有明崎～水月橋) 写真:吉井重幸

南湖のいきもの 動物編

ちょうるい
鳥類

棚邊美根子

福島県で確認された約300種の野鳥の中で、南湖周辺では約100種を観察することができる。赤松と桜並木、楓などの紅葉樹に囲まれ閑山や那須連峰を望む史跡名勝地南湖は、県の鳥キビタキ・オオルリ・メジロ・キツキ類をはじめ、ダイサギ・コサギ・トビなどの野鳥も多く、一年を通し気軽にバードウォッチングを楽しめる場所として市民をはじめ観光客の皆様にも親しまれている。

南湖で営巣・繁殖が確認されたヨシゴイは、福島県レッドデータブックで絶滅危惧種Ⅱ類に指定された大変貴重な鳥である。カイツブリ・バンなども生息し、親子の微笑ましい姿を見る事ができる。渡りの時期には、カムリカイツブリ・ミミカイツブリ・ミコアイサなども羽を休めに立ち寄り、時折上空には、オオタカ・ノスリ・チョウゲンボウなどの猛禽類も飛び、まさに南湖は野鳥の宝庫である。



キジ (オス) (キジ科)

「日本の国鳥」留鳥
顔の赤い皮膚の裸出部は、繁殖期には大きくなる。ケン、ケンと鳴く。

2004年6月7日 撮影:棚邊美根子



キビタキ (オス) (ヒタキ科)

「福島県の鳥」夏鳥
「キビタン」のモデル。鏡山周辺で鳴き声が聞かれる。

2007年7月6日 撮影:矢内 彰



ウグイス (ウグイス科)

「白河市の鳥」留鳥
鳴き声は聞くが、なかなか姿が見られない。

2007年7月19日 撮影:棚邊美根子



ノスリ (タカ科)

留鳥 「福島県レッドデータで準絶滅危惧」トビより小さく電柱にとまっている姿を見かける。

2007年1月28日 撮影:矢内 彰



オオヨシキリ (ウグイス科)

夏鳥 「福島県レッドデータで準絶滅危惧」営巣、繁殖。河川敷や湿地のアシ原で見られる。

2004年5月23日 撮影:三森 繁



ヨシゴイ (サギ科)

夏鳥 「福島県レッドデータで絶滅危惧Ⅱ類」南湖で営巣、繁殖が確認され、貴重。

2004年6月27日 撮影:棚邊美根子



オオバン (クイナ科)

冬鳥 「福島県レッドデータで希少」毎年数多く見られる。

2007年10月29日 撮影:矢内 彰



バン (クイナ科)

夏鳥 「福島県レッドデータで準絶滅危惧」南湖で毎年営巣、繁殖。

2004年5月17日 撮影:三森 繁



カワセミ (カワセミ科)

留鳥
青緑色で非常に美しい。南湖では湖面を行き来する姿が見られる。

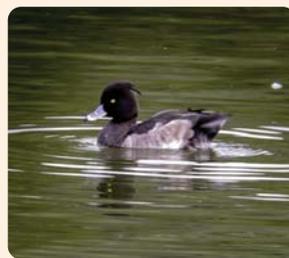
2007年8月4日 撮影:矢内 彰



カイツブリ (カイツブリ科)

ヒナ(左)留鳥 南湖では菱を集めて営巣、繁殖。潜水捕食。同じ仲間の「ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、カムリカイツブリ」も見られる時もある。

2007年8月4日 撮影:矢内 彰



キンクロハジロ (オス) (カモ科海ガモ類)

冬鳥 潜水捕食。後頭から房状の冠羽がたれさがる。(写真は雄)

2007年10月30日 撮影:矢内 彰

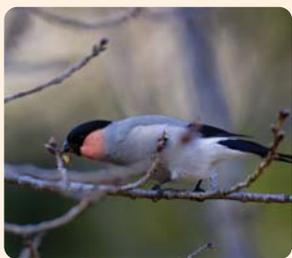


ダイサギ (サギ科)

留鳥
南湖の御影島周辺に数多く見られる。

2004年6月7日 撮影:棚邊美根子

南湖のいきもの 動物編 ちょうるい 鳥類



ウソ (オス) (アトリ科)

冬鳥 口笛のように聞こえるさえずりは、ヒー、ヒーヨホッホ。頭は黒、喉と頬が赤い。主に桜の花芽を好む。

2007年2月26日 撮影:矢内 彰



エナガ (エナガ科)

留鳥 スズメより小さく、丸味がある。さえずりは、チーチーチシリリジュリ。群れで行動する。

2007年2月12日 撮影:矢内 彰



メジロ (メジロ科)

留鳥 スズメより小さく黄緑色、白いアイリング。さえずりは、チーチュルチロルルチュルチー。桜の密や果汁を好む。

2007年4月30日 撮影:矢内 彰



オオルリ (オス) (ヒタキ科)

夏鳥 スズメより大きく、青紫色でヒーリーリーチンと鳴く。鏡山で見られることが多い。

2007年7月16日 撮影:矢内 彰



アオゲラ (キツツキ科)

留鳥 南湖では営巣、繁殖が確認された。

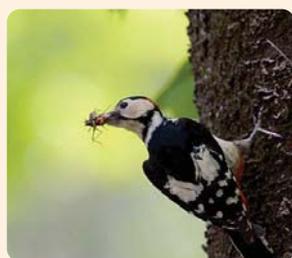
2007年5月16日 撮影:棚邊美根子



カシラダカ (ホオジロ科)

冬鳥 スズメくらいの大きさで後頭に短い冠羽がある。

2005年2月21日 撮影:棚邊美根子



アカゲラ (キツツキ科)

留鳥 南湖では営巣、繁殖が確認された。

2007年5月21日 撮影:矢内 彰



オナガガモ (オス) (カモ科淡水ガモ類)

冬鳥 頭部はチョコレート色。鳴き声は、ピル、ピル。南湖では数多く見られる。

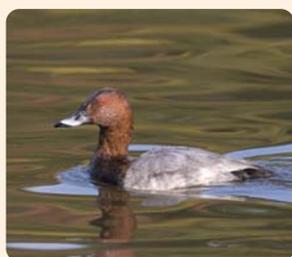
2007年3月24日 撮影:棚邊美根子



ヒドリガモ (オス) (カモ科淡水ガモ類)

冬鳥 頭部は赤褐色で額から頭頂は黄白色。鳴き声は、ピューイー、ピューイー。南湖では数多く見られる。

2006年11月18日 撮影:棚邊美根子



ホシハジロ (オス) (カモ科海ガモ類)

冬鳥 赤褐色の頭と頸。鳴き声は、クルル、クルル。潜水捕食。

2007年11月15日 撮影:矢内 彰



ホオジロ (オス) (ホオジロ科)

留鳥 スズメより大きく、木のてっぺんでさえずる。「一筆啓上仕り候」と聞こえる。

2007年7月6日 撮影:矢内 彰



カケス (カラス科)

留鳥 低山から山地のよく茂った林、冬は平地の林で見られる。ハトくらいの大きさ。地鳴きは、ジェイ、ジェイ、シャーシャー。

2005年2月10日 撮影:棚邊美根子